

武道における身体の有義性

日大生産工(院) ○岡本嵩弘 山本壽夫

1. はじめに

私は大学の部活動に所属し、弓道を4年間修練した。修練の過程で様々な弓道教本を読んだが、その中の解説には感覚的、また抽象的な表現が見受けられる。「射法は、弓を射ずして骨を射ること最も肝要なり。心を総体の中央に置き・・・」¹⁾ などである。上記は全日本弓道連盟発行の弓道教本第一巻の初めに記されている吉見順正の射法訓であるが、こうした表現は弓道をしていない人はおろか弓道を経験した人であっても完全に理解することは難しいだろう。抽象的であるが故にその人それぞれの解釈ができてしまうためである。本研究ではこうした武道の不明瞭な部分を暗黙知と定義し、習得に重要な要素を明確化、また他分野への発展手法を考察する。

2. 研究目的、研究目標

2-1 研究目的

本研究の目的は次の通りである。

(1) 弓道において暗黙知の習得にはどの要素が重要であるのかを明確化する。

(2) またその弓道における暗黙知の習得に重要な要素を踏まえ、その要素の他分野への活用方法について考察する。

2-2 研究目標

(1) 弓道において暗黙知の習得に必要な要素はなんなのか、またどれだけ重要なのか、各々の重みづけをする。

(2) 暗黙知の活用を企業経営とし、企業経営の改善を目指す。

2-3 研究方法

(1) 質問紙調査による統計解析(重回帰分析)。

(2) ケーススタディ。

3. 先行研究

3-1 湯浅泰雄(1990)「身体論東洋的心身論と現代」

3-2 国土 将平(1991)「陸上競技選手における競技成績の達成確率を用いた競技力特性の評価」

3-3 石井 源信(1973)「スポーツに対する態度の性差および発達的变化 : 4. 心理学的研究」

3-4 小林 敬子(1995)「バスケットボール競技の勝敗に影響を与える要因分析 : 数量化3類を用いた解析を主として」

3-5 野中郁次郎 竹内弘高(1996)「知識創造企業」

3-1 東洋の芸道の特徴である暗黙知について示している。3-2 は身体能力を用いた競技実力の評価を示している。3-3 は心理特性とスポーツキャリアの関係性について示している。3-4 は指導者の着眼点の重みづけの手法が示されている。3-5 の暗黙知共有、組織における暗黙知の活用方法について示している。

4. 現状分析

(1) 弓道の暗黙知について

● 弓道の知識について

前項 1. はじめにで述べたように弓道教本には理解の難しい抽象的な表現が多く見受けられる。弓道教本には全日本弓道連盟やその他派生流派等多く出版されているが、どの弓道教本からもこのような表現は多く見受けられる。なぜ広く一般的に販売されている弓道連盟発行の弓道教本で抽象的な表現を使うのだろうか。それは弓道には言語化できない、または言語化すると重要であることが伝達できないといった暗黙知の技術を含むからではないだろうか。

● 暗黙知について

暗黙知とは哲学者であるマイケル・ポランニーが自身の著作である「暗黙知の次元」で

A Study on Physical Significance in BUDO

Takahiro OKAMOTO, Hisao YAMAMOTO

示した概念である。マイケル・ポランニーは伝達不可な知識を暗黙知と表現した。暗黙知の例として自転車の乗り方がよく挙げられる。自転車を日常的に乗りこなすことができる人は多いが、その乗り方を自転車に乗ることができない人に言語で教えることができる人は少ない。これは自転車の乗り方には重心の位置、速度の調整、ハンドルの操作、視線の動かし方等といった複数の操作を一度に行わなくてはならないからである。

- 弓道に関する知識のポジション

先述のように弓道教本には抽象的な表現が多いことから、弓道にもこうした暗黙知的な知識が多分に含まれていると考えられる。その場合、弓道上達の上では教本を読み知識を身につけることは重要であるが、それらだけでの上達は見込めず、実際に身体を動かすことが必要不可欠なのではないかと考えられる。

- (2) 暗黙知の他分野活用について

- 経済における暗黙知について

経済学者である野中郁次郎氏は自身の著作である知識創造企業で、企業における知識のマネジメント理論化についてその重要性を述べている。同書では企業において組織的知識創造が日本企業の国際競争力の源泉と言い切り、その手法について示している。そこでより重要になってくる知識が暗黙知であるとしている。

- ナレッジマネジメントについて

ナレッジマネジメント (knowledge management) とは企業において個人の持つパーソナルナレッジ、主に暗黙知を管理・共有化し、業務の効率化を図り、企業経営の手法である。野中氏は日本企業の強みはこうした無形の要素にあるとし、組織理論を構築しようとしている。

5. 仮説

以上の分析より以下の仮説を検討できる。

- (1) 弓道を上達する上では知識をつけるだけでは不十分であり、実際に弓を引く練習を相当量積む必要がある。

- (2) また暗黙知習得には共通項があり、暗黙知習得の要素を他分野にも活用が臨める。

6. 分析データ

弓道において暗黙知の習得プロセスを分析

するため、弓道経験者に質問紙調査を行う。対象にするのは18歳から24歳の男性弓道経験者である。弓道の経験歴による実力差も考えられるため最低でも3年以上弓道を経験していることを対象者の条件とした。質問紙で調査するのは的中データ、練習量、日数や練習に関しての取り組む意識、思考などである。意識の項目には弓道に対する考え方、実際に弓を引いている最中に考えていること、調子の良し悪しの傾向などを質問として用意した。的中データとは弓道においてその個人の實力をはかる一種のバロメータである。これらの質問を基に対象者の實力と意識の関連性を分析していく。

7. 検証方法

- (1) 質問紙調査の結果を基に重回帰分析を行い、實力と質問項目との相関関係を分析する。目的変数 Y を的中率、説明変数 X を質問項目とした。説明変数は変数減少法に基づき選択していくものとした。この操作をすることで、弓道において的中率を高めることを弓道の上達とした時にどの要素に注意すれば上達しやすいかが要素単位で明確になる。

- (2) 他分野への活用

前項4.現状分析で述べたように暗黙知の共有化は組織企業で経営手法として注視されている。近年でもナレッジマネジメントを積極的に取り入れている企業が存在する。そうした事例の中から本研究で分析した暗黙知習得のプロセスとの共通項を結びつけることで、他分野での活用を見込める。

8. おわりに

本研究では弓道において暗黙知の習得にはどの要素が重要であるのかを明確化すること、またその弓道における暗黙知の習得に重要な要素が他分野へどのように活用できるかについて考察するものであった。今後の研究ではより精度を高めていく所存である。

(注)

- 1) 全日本弓道連盟,「弓道教本 第一巻射法編」,全日本弓道連盟,(1977)p.4.

- 2) 野中郁次郎,「知識創造企業」,東洋経済新報社,(1996)p.95